



全体会

10/11(木)

新城文化会館 大ホール

特別講演

コミュニティデザイン ～人がつながるしくみをつくる～

山崎 亮 (studio-L代表・京都造形芸術大学教授)



山崎
studio-L代表
京都造形芸術大学教授

コミュニティデザイン ～人がつながるしくみをつくる～

studio-L代表
京都造形芸術大学教授

山崎 亮
やまざき りょう



愛知県生まれ。まちの課題を、まちに住む人たちが解決するための方法を提案する、コミュニティデザインという仕事に携わる。まちに住む人たちとワークショップを行い、その地域の将来を考える総合計画づくりを行う。建築やランドスケープのデザイン、公園や駅前などの公共的な空間を使いこなすためのプログラムの仕組みを考えたり、プロジェクトの計画づくりにも携わる。関わる人が、常にそのプロジェクトを通じて、積極的にまちへと関わるチームを生み出すことを目指している。離島や地方自治体、公園からデパートや駅前、病院など、仕事のフィールドは多岐にわたる。

ご紹介いただきました山崎でございます。どうぞよろしくお願ひします。飯盛先生とは、たぶん一年前くらいに知り合って、それから何度かいろんな所でご一緒させていただくのですが、油断すると、やっぱり飯盛(いもり)先生と呼びたくなくなってしまいますね。“いさがい”さん、難しいです。佐賀出身だということで、佐賀には多い地名なのだろうというふうに思っておりまして、今年度から、実は僕も佐賀市でまちなか再生のプロジェクトを担当させていただくようになりまして、今、100人くらいの住民の方とワークショップをしています。僕の仕事はコミュニティデザインということで、コミュニティの方々と地域を元気にしていく、そんなことが仕事です。佐賀市の人、100人のワークショップの参加者の名簿の名前を見てみても、その中に“いさがい”という名字はないですね。佐賀でもたくさんいる名字ではないのではないか、という気がしてきました。

今日は、お手元に事前に資料をお配りしていないと思います。あるいは資料をもしお配りしていると思えば、その資料は今から喋るものと違うものになっていると思います。飯盛さんとお話できるのだったら、飯盛さんのお話を聞いたときにパワーポイントを作ったほうが面白くなるのではないかと、何も作らずに来て、いくつかのものだけですね、最初の何枚かだけ、ご用意しました。

今日、地域の外部者が大事だ、というお話を先程いただきました。「プラットフォームアーキテクト」、そういう外部者と内部の方が接するプラットフォームをどういうふうにしていくか、ここを巧妙にやっていかなければならない、簡単なことじゃない、というようなお話をいただきました。地域の支援を、本当に支援だというふうに顕在化させていく、あるいは自覚してもらう、資源化のプロセスが大事だというお話をいただきました。このあたりを聞いていて、だとすれば、我々が関わっているプロジェクトの中では、島根県の隠岐の島

の海士町のプロジェクトの話をするのが良いかということで、先程、海士町のをこの中に入れ込みました。入れ込んでみたらですね、120分くらいありました。でするので、かなり早口で喋るか、落ち着いて喋るのですけれども、間を飛ばしていくかのどちらかだと思ひながら、皆さんの表情を見ながら、今、計画を練っているところです。途中からすごく早口になるかもしれませんが、早口で聞き取れないよと寝始めたら、ゆっくり、また喋ろうと思ひます。

だいたい自己紹介ですが、これは飛ばしてもいいかな。大きな島がありますね、これ後ろの方、たぶん文字が見えないと思うので、4つくらいに仕事は分かれていると思ひただけならと思ひます。一番左側が、デザインですね。特に建築の空間のデザインだったり、ランドスケープという公園とか庭の設計、我々はずっとデザイナーですので、こういうハードのデザインという仕事を今でもやっています。これは一番左側ですね。

その一個右側にパークマネジメントと書いてあるのは、特に公園なんかはですね、ハードを作っただけでは、5年も経たないうちにほとんど誰も使っていない公園になってしまう。税金の無駄遣いになってしまうかもしれない。だったら、地域にいるNPOの方々と公園を楽しく使いこなす仕組みを作ったほうがいいのではないかと、アメリカではパークマネジメントと呼ばれていますが、日本でも公園を、特に博物館に館長がいるように、公園に園長がいてもいいのではないかと。そこでいろんなプログラムが行われているという公園があってもいいんじゃないか、ということ計画するような仕事をやっています。で、そんなことをやっているとだいたい、地域の人たち、100人200人の人たちとよくワークショップという話し合いをすることになりますので、別に公園の中だけじゃなくても、まち全体でそれをやればまちが賑やかになるのではないかと、まちづくりという仕事をやるようになりまし

た。さらにはそんな人たちと総合計画と一緒に作ったらどう？と言われるようになりまして、今はいくつかの町で総合計画のお手伝いというのをしています。ひょっとしたら、今お付き合いしている自治体の方が来られていて、うちの名前がないじゃないかというふうにおっしゃる方がいるかもしれません。すみません、これは半年前くらいのデータですので。今は、他にもお付き合いしている自治体の方がいらっしゃいます。

後は、実践だけでなく、研究としてそれをどういうふうに着目していくかというようなこともやっています。5年間、兵庫県の研究所の職員として、中山間地域のいわゆる過疎地の調査、研究をやりました。あとは、参加型のまちづくりに関する研究というのをやっています。あとは京都の大学で、これは芸術大学なのですが、デザインについて学生たちと考えているというのが簡単な自己紹介です。

僕がいつもお話することなのですが、人口が減っていくのは、特に今回のテーマで集まった皆さんであればよくご存知のことだと思います。過疎地域は、日本全体の人口が減る、30年前からすでに人口を減らしているという、先進的な地域もいっぱいありますので、そういう意味では、ここにお集まりの皆さんの興味の対象は、人口が減っていくなかで、どういうふうに豊かな、あるいは幸せな地域を作っていくのか、ということではないかなと思います。

2050年には、1970年と同じ人口規模、2100年には1910年と同じくらいの人口規模になるといわれています。我々は大阪をベースにやっていますので、大阪の地図をたまたま市街地がどういうふうに広がっていったかを色塗りしてみたものですが、もし、2050年に1970年と同じくらいの人口規模になるのだったら、これから街は大きくなっていくわけではないだろうと。むしろ、また戻っていく。まったく折り返しでこうならないとはしても、これより大きくなっていく時代ではないということが言えると思います。とすれば、大阪の白の部分ですね、郊外、あるいはさらに中山間地域というのは当然のことながらより早く人口が減っている。

人口が減っているところでどんな課題が出ているかというのは、皆さんが一番よくご存知のことだと思います。このことを、人口減少先進地というふうに呼んでおります。これは、この5年間に人口がかなり減ったという都道府県が赤、人口が若干減ったというところが黄緑、人口が減っていないか増えているというところが白とい

うふうに、都道府県別に色塗りしたものです。だから、大都市圏を抱えているような都道府県はだいたい白です。都市部に人口が今でも流入している、ということもありますから、人口が減っていないか、あるいは増えているということになります。20世紀だったら、こういうところが都会で進んでいると。20世紀的にいえばナウい場所だったのだらうと思いますね。

ただ、もうご承知のとおり、こういうところは先進地ではないですね。むしろ、この地図でいう赤い部分のところ、まさに日本の未来ですね、先進地になっていると言えると思います。東北や島根や山口や、関西では和歌山が断トツに進んでいます。我々大阪は、大都市圏を抱えているにもかかわらず、もうすでに人口が減りはじめていると。かなり優秀だと思います。僕らはこういうところで仕事を続けていきたいと思いますが、そんな我々でも、和歌山にはかなわないです。何か新しいことを見に行くのだったら、和歌山を参考にしなければならぬ。

最先端はやっぱり、人口がいち早く減っているところだろうと思うのです。これはなぜか。2020年になると、だいたい真っ赤です。大都市圏を抱えている都道府県でも黄緑に。ようやく焦りはじめめるのです。2020年くらいから。小学校が統廃合になったぞ、とかですね、やばいと。限界集落なるものが生まれてきたとか。横浜あたりでも焦り始めるのでしょうか。しかし、島根に言わせれば、そんなの40年も前からもう戦ってきているよと。そんな課題、いくらでもあって、それをどう乗り越えてきたかなんて40年分の蓄積があります、という話になるのです。

2030年になればほぼ真っ赤ですから、いち早く減っているところで一体どんな取組があるか、これから、ますます注目されることになります。もうすでに、過疎地は注目されつつありますね。単に過疎というだけではなくて、そこで新しい取組が生まれているところは、ものすごく注目されることになっています。徳島の上勝なんて、まさにそういうところだと思いますね。そういう場所、なおかつ、人口が減ること自体は、そんなに悪いことではないのではないか、という思いも出てきています。

これは、僕はそんなに研究をきっちりやっている人間ではなくてデザイナーなので、直感で描いた図ですから、たぶん間違っていると思いますけれど、人口統計が始まったところからしか、だいたい日本の人口の推移はわからないですね。だからだいたい上のような図を見せられ

るわけです。真ん中が高くて両端が少ないと。ところかもっと左側をずっと延ばしてみたら、どれくらいだったのか。もっと右側を伸ばしたらどれくらいか。どっかに将来、またもう一個山ができる可能性があるか、あるいはかつて一度でも同じくらいの山がおきていたことがあるか、という、たぶんないのではないかと思うのですね。西暦1000年から3000年くらいまでの人口を仮に予想してみたら、ずっと長い間人口は1,000万人から3,000万人くらいでこの国は暮らしていて、そして、これからまた長い間、人口1,000万人から3,000万人くらいで暮らしていく国になるのではないかという気がします。

いろんなデータからですね、実は3,500万人くらいがこの国土の適正人口ではないかというようなことも言われていますね。これは環境容量と言われます。ある環境に人間はどれくらい住めるか、無理なく住めるか、という意味では、日本は3,000万人から3,500万人くらいではないかなという気がします。江戸期ですね、江戸から明治に移る頃くらいの人口、これくらいが限界ではないかと言われています。今、オーガニックとか有機農業と言われてはいますが、当然、江戸時代は有機でした。化学肥料を使わずに食糧生産をしていて、何万人くらいが食べていけるのか。あるいは、日本の国土に降った雨だけで、この水だけで、日本人何万人くらい生きていけるのか。バーチャルウォーターとか、海外から輸入したような、見えない水であったりとか、あるいは原子力等のちょっと無理があるかもしれないようなエネルギーを使わずに住める、適正な人口規模を、我々は考えていく必要があると思います。

日本全国でいうとこうだ、ということなのですが、実は各自治体、あるいは、集落も同じかもしれません。一時期人口がものすごく増えちゃって、今、無理して自治体経営をやっていると考えられるかもしれないですね。



今、10万人ですという自治体。本当は、3万人が自然な形なのではないかと。あるいは3万人のところ。ここ100年間で3万人に増えてきたけれども、元々3,000人の村だったよというようなところが、合併以前のところを全部足して合わせてみて、数字を考えてみても、ひょっとしたら、無理なく暮らせる人口規模というのは、もっともっと少なくあるべきではないか、というような考え方もあるかもしれません。だから、人口自体が減ることは、そんなにまずいことじゃないということも、あっていいのではないかなと思います。

ところが、人口が減ると、とにかくもういろいろと悲鳴があがっている、というようなことであったり、各種調査でもですね、困っていることが多いようなことが、出ています。耕作放棄地だったり、森林荒廃だったり、病虫害、獣害、ゴミの不法投棄、空き家。こういうものは、ものすごく問題だということになってはいますが、一時期、人間が増えすぎて、今適正に減っているのだけれども、その減っているところが空いてくるのはある意味では当たり前で、これをいかに豊かな村に戻していくか、という戦略が必要なのではないかと思います。

そういう目線から見れば、空き家も空地も資源だらけですね。これをどう使いこなしてやろうか、というクリエイティブな目で見れば、いろんなことができる可能性があると思います。デザイナーというのはそういう発想が大好きですから、チャンスがありまくるというのがこれからの日本の状態だろうと思います。その時に、地域資源化プロセスは、非常に参考になるなあと思ったのです。先程飯盛さんがおっしゃったとおりですけども、地域資源を再認識してその時に認識したもの、これを売り出そうとぼっとやるのではなくて、まずはソーシャルキャピタルというのですかね、そこにいる人たちが共通の考え方、しきたりやルールを刷新したり、つながりをもう一度取り戻したり、あるいは別の意味をひっつけていく。これはなんか問題だと思っていたけれどチャンスではないかとか、これ資源じゃないかと、みんなと共有しながらいろんなアイデアを出せる状態をつくって、資源展開をしていくと。ここに、先程も話がありましたけど、思いもよらなかったような発明がうまれてきたりとか、ムーブメントがうまれてきたりとかいうようなことがあるのではないかという気がしています。

その一個の事例になればいいなということで、一つ、海士町ですね、島根県、これで「あま」と読みます。「海」

に武士の「士」と書いて、海士町というところでやっていたプロジェクトをお話しようかと思えます。

これが海士町の位置ですね。人口は2,300人で、IターンとUターン、地元継続居住者という人たちがいます。この人たちが、それぞれ相互になかなか交流ができないうということもありましたので、交流ができるきっかけとして、総合計画を住民参加型で作っていきこうという話になりました。住民参加で作っていくときに、100人の町民が集まってくれましたので、この人たち4つのチームに分かれてもらって、それぞれのテーブルで、今後10年間、海士町はどういうことをやっていくべきか、という話し合いをしてもらいました。人チーム、暮らしチーム、産業チーム、環境チームというようなチームに分かれて話をしてもらっています。これは、いわゆるワークショップですね。

全体で8回やりましたけれども、それ以外に40回以上、非公式に集まっています。家で集まってご飯を食べながらワークショップをやっていたり、あるいはその海士町に住んでいる人同士が合宿といって集まってですね、二泊三日で喧々諤々議論をする、というようなことをやっています。合宿二泊三日、大人たちはほとんど寝てないですね。寝ずに総合計画のタイトルを考えるとかいうことをやっていました。

総合計画っていろんなところから取り寄せてみると、「潤い豊かな町づくり」とか「人にやさしい町づくり」とか、そういうタイトルが多いのですね。海士町、そのタイトルはないよなところからスタートしました。海士町オリジナルのやつにしなきゃ、と自分たちでハードルをあげちゃったので、最後タイトルを決めるときはものすごくしんどくて。三日目の朝なんか、ほとんど睡眠不足で意識朦朧としていますね。そんな状態で合宿をやって、「島の幸福論」というタイトルを決めました。

こういうときにコミュニティデザイナーがやる仕事は、この三日間ぐっすり睡眠を取ることですね。しっかり寝る。で、三日目の朝行って「どうでした、決まりましたか？」と話を聞きに行くのですね。「あかんねん。」「もう、わからへんねん。」「回ってんねん。」とみんなが言っていたら、出てきている言葉をうまく組み合わせ、「島、笑顔、幸福、いい言葉が出ているじゃないですか。『島の幸福論』っていう、こんなタイトルどうですか。」とか提案すると、「それでええわ。」みたいな感じですね。「やってくれ、やってくれ。」という

感じになるのです。言葉は住民の人たちから出ているので、最後はその組み合わせの問題です。これで「島の幸福論」というタイトルの総合計画を作って、島の300人の方々に集まってもらって、発表会を、住民の人たちがやりました。

自分たちはどういうことを計画しているのか、どういふことを海士町と一緒にやっていきたいのか。で、策定委員会や議会にかけなければいけないので、それはやりました。で、総合計画を作ったのですね。

ただ、別冊というのがついています。これが、ちょっと特徴的なことかもしれませんね。まず、本編のほうは、基本的に海士町の幸福ってどんな指標から成り立っているのかというのが、最初に書いてあります。東京とか大阪、都市部が目指している幸福の指標と、海士町が目指している幸福の指標はだいぶ違うだろう、ということからスタートしているのですね。海士町の人から見て、都会の人達は相当学力、教育が高い、特化してですね。「なんであんなに大学卒が多いんや。」「俺ら、中卒で全然問題ないと思っているけれど。」というのが海士町の人たちの意見ですね。なかには、「大学院とか出とるやつもおるらしい。」「何、考えとんねん。」というのが海士町の人たちの意見です。考えてみると、「ちょっとでも所得がたくさん欲しいのんちゃうか、お金を欲しいのんちゃうか、ええ会社入って、金欲しいと思ってるのんちゃうか。」と。「わかるな、そら欲しいかもしれん。しかし、東京の人らって、なんでそんなに金を欲しいんや。」と。「ちょっとでも広い家に住みたいやろ。」とか、「安全な場所に住みたいやろ。ちょっとでも自然があるところに住みたいのんちゃうか、東京人も。」なるほどそうかと。「ほな、東京の人らは広い家に住めてんのか。」「いや、住めてないらしいで。」と。これは生活環境ですね。「安全なんか東京は。」と「いや物騒らしいぜ。」「自然あんのか。」「ないらしいぜ。」と。「ほなあかんやん。」というのが、海士町から見た、海士町の人たちが言った東京の人達の暮らしですね。

これ東京で講演会をやると、だんだんだんだん、会場がものすごい雰囲気になっていきますね。「なに言っとなねん。」と。海士町の人たちが話し合ったのです。で、海士町はどうか。東京の人たちが目的にしている部分、目標にしている部分、「もう手に入れているやないか。」というのが海士町の人たちの意見ですね。生活環境、広い家。住めているのですね。一軒家を借りても家賃が一万円しない、月にね。そういう場所ですか

ら、広い家はいっぱいありますね。自然環境。ありますね。腐るほどありますね。一部、腐っていますね。手入れ出来てないですね。安全安心な社会。めちゃくちゃ、安全安心です。車を止めた時は、キーは絶対抜いちゃいけないのですね、離島なんて。キーを抜いて移動するIターンなんかいたら、すぐ怒られます。何かあった時、「誰が車を動かすんや。」というふう怒られますね。離島で車を盗んだって、たかがしれていますからね。次のフェリーが出るまで、絶対島の中にいなきゃいけないのですから。キーは差したままにする、これ常識です。

そんな安心安全で、広い家があって、自然が腐るほどあるわけですから、だったら、初任給が少ないとか学歴が低いとかいうようなことではなくて、むしろこっちを活かして、都会の人たちが羨むくらいの抜群の暮らしをどんどんやってしまえば良いじゃんというのが、「島の幸福論」の基本的な考え方です。

で、4つのチーム、人チーム、産業チーム、暮らしチーム、環境チームが、それぞれ政策の事業までを考えて、行政と一緒にやりたいものだけ、この右側に小さくページ数が書いてあります。だから住民ベースで考えたものです。これ、行政の何課がどこを応援するか、というのが分からないので、次のページをめくると、それぞれ教育委員会はどれをやるか、産業振興課がどれを担当するかということで、色がちょっと入れ替わっていますが、どこの課がどれを応援していくかが示されています。

で、別冊の方に書いてあるページ数は、こっちの絵本みたいなものの中に入っているということです。絵本みたいなものの中は、目次は単純です。これ海士町の4つのチームが「我々は、こんな町づくりの活動をやります。」と言った24の提案が、人数ごとに収められているというものです。一人でできる活動は、もうすぐ一人からやりなはれと。10人でできる活動だったら、10人集まって町づくりの活動をやってください。ただ、100人、1,000人集まらないと出来ないことだけ、役場と一緒にやりましょう、というのがこの計画の骨子です。

つまりプライベートとパブリックは二つに分かれているのではなくて、実は、間のコモンの領域が、グラデーションでスケラブルなのです。プライベートからパブリックまでは、自由自在に移動できるというようなことを海士町の住民の人たちに伝えようと思ったって、漁師のおっちゃんはですね、プライベートとか、パブリックとかいう言葉はようわからんわけです。「一人ででき

ることは、一人でやりなはれな。」というのが、基本的な考え方です。で、これページは二つに分かれていますが、見開きで文字があって、イラストがあって、バックデータがあって、何人でやることかが、インデックスで付いているということですね。海士町の総合計画は、「とにかく言ったらやってください。」と。提案したのだったら、言いつ放しはだめよ。「陳情要望型の意見はだめです。」と。「提案型で話をしてください。」と言っていましたので、各チームは始めました。

産業チームは炭焼きを開始しましたし、暮らしチームはお誘い屋さんをやっています。島の人たちは、なんかクリスマス会をやります、とチラシを撒いただけでは出てこないんですね。恥ずかしがり屋だから。みんな、こう誘いに行くのです。お一人でお住まいの高齢者の家に、「クリスマス会やりますよ。」「餅つきやりますよ。」「花見やりますよ。」と誘って、日がな誘っている。この人たちは「お誘い屋さん」というプロジェクトをやっています。

環境チームは、水を調査しました。海士町は、周りが全部塩水なのに真水が沸いていますから。この水は水質はどうなのか、何年くらい使い続けられるのかというのを、大学と共同しながら調査しています。けっこう、良い水らしいのですよ。平成の名水百選に選ばれました。名水百選に選ばれると、毎年持ち回りで名水サミットをやることになるのです。2009年のときに、「海士町さんで名水サミットをやってください。」と言われてました。役場の人は「しょうがない。イベント屋さんとか呼んで盛大にやるか。」と思って、一応、環境チームの20人の、ある意味イベントは素人ですけれども、環境チームに相談したら、「僕らが全部仕切ります。」と言って。環境チームが—17歳から65歳くらいまでの20人ですけれども—この人たちが、300くらいの名水マニアが集まる、名水サミットなるものを成功させました。ダイレクトに偉い大学の先生とかに、「アマチュアの町民ですけれども。」と言って電話して、「来てくれませんか。」と。「こういう依頼は初めてだ。」と言って、けっこう来てくれたのですけれども。そういうふうにして、来てくれました。

僕も、行きがかり上、「司会進行をやれ。」と言われて行きましたね。会場に着いたら、こういう横一文字（の看板）とか自分で作っているわけですね。「山崎さん、どうですか。僕が作ったやつですよ。良いでしょう。」とか言われるわけですよ。まあね、悪くはないで

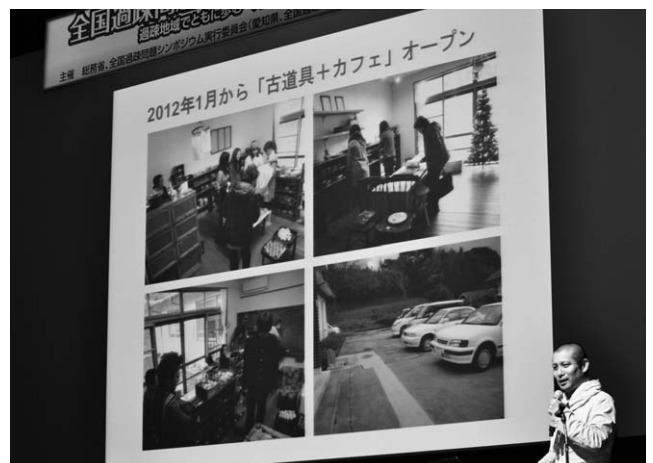
すけどね。前々から、「僕らはデザイナーだから、デザインに関することがあれば、僕らに必ず相談してくださいね。」と、4つのチームには毎回言っていたのですが、すぐに忘れるのです。喋りすぎるからでしょうね。デザイナーというのは、寡黙で、ちょっと斜に構えているほうが格好良く、あの人デザイナーだと覚えられるのでしょうか、僕は、必ず忘れられちゃいます。僕ら、デザイナーだってことを忘れて、勝手にマイクロソフトワードとかで、こういうのを作っちゃうのだと思うのですね。で、行書体っていうのを、イタリックとって斜めにするということは、絶対やっちゃいけないことですからね、デザインの分野では。あり得ない。「ないです、だめです。」と言ったら、「そうか、山崎さんでデザイナーでしたか。」とやっと思い出してくれるわけです。そう、だから「デザインに関することがあったら、僕らに相談してください。」「分かりました。次は相談します。」と言いますが、忘れちゃいますね。三か月くらい経って海士町に行ったら、環境チームみんなで「環境チーム」というTシャツとか作っていましたね。それがダサいから。「そういうの、僕らに相談してと言っているでしょ。」「あ、忘れていました。」という感じになります。でも良いでしょう。住民の方が自ら動き出すという意味では、僕はすごく嬉しいですね。何かのきっかけになっているのかなあという気がします。

人チームは、「海士人塾」という、何か若者がそこで活動することをきっかけに、ネタにして、地域のベテラン層と若い人たちが集まっているんな話ができる場を作りたいということで、空き家を改修して、みんなが集まれる場所を作っていくというプロジェクトをやりました。ちなみに、この黄色い風船みたいなやつはしゃもじですね。これは、海士町は「キンニャモニャ踊り」という、しゃもじを叩きながら踊る踊りが有名です。普段からしゃもじって使っているんで、何となく感覚的には近いかなということで、このしゃもじをイラスト化しました。ゆるキャラ化はしていません。イラスト化しています。これ、ぜんぶ顔が違うのですね。ゆるキャラが毎回顔が違っていたら、ゆるキャラとして認識できないので、これは単にイラスト化しただけです。

この提案をしてくれた人たちの顔に似せて描いているのですね。これは2,300人の島ですから、だいたい、見れば分かるわけですね。真ん中に写っているのが小田川さんですね。斜に構えている中村さんですね。全然、参加しない、誰が見たって中村さんですよ。中村

さんは46歳、元ヤンキーですね。絶対、こういうところに来ない。最初にヒアリングに行った時も、「俺は、おまえらみたいのが一番嫌いなんだ。」と言っていましたね。「素晴らしい、あなたみたいな人がいないとまちづくりは面白くない。」、と紐でしばりつけてワークショップの会場にもって行きましたね。中村さんが来ると良いのですよ。ヤンキーの子分達が付いてくるのですね。中村が行くぞということで、一緒にワークショップの会場に来てくれる。ワークショップ第一回目とかだと、非常にまちづくり好きのおじさんがですね、「ちょっとよろしいですか、そもそもまちづくりというのはですね…。」と演説が始まったりするのですが、中村さんとかが「おい、うるせいぞ。」と言ってくれるのですね。そうすると、会場が非常にいい雰囲気になりますね。それはそうですね。まちづくりで「そもそも論」なんて聞きたくないですからね。楽しみたくて来ているわけですから。「そもそも…。」とか言われた時に、ちゃんとそれを「うるせえ。」と言ってくれる人がいるということは、良いですね。小田川さんもそうですね。この人も、「私は、行政がやるが一番嫌いですから。」と開口一番言われましたからね。素晴らしい。この人は、ヴィトンのバッグ以外に何も興味がないという人ですね。まちづくりなんて、絶対興味がない。こういう人が来ないと面白くない、ということで引っ張ってきた人です。そういう人たちが活躍してくれていますね。

これは、保育園の跡地をみんなが集まれる場所にしようということで、小田川さんが今リーダーをやっています。自分たちの手で、これ行政が材料だけ提供しましたが、保育園の中をきれいに改装して、「海士人塾」というみんなが集まれるきっかけになるような、イタリアンレストランを1日限定で。この人、毎月やってくれています。これ46歳、元ヤンキー中村さんです



ね。「俺、バーがやりたい。」、と子分と一緒にバーをやってくれています。2週間に一回くらい、バーをやっていますね。若い人たちがバンドの演奏をやったりしていますが、これはネタです。何でも良いのですね。行政の事業に基づくものですから、集落の年寄衆も必ずちゃんと出て来てくれる、というのが特徴です。年寄衆にしてみれば、このうるさいバンドは早く終わってほしいのですね。これが終わったら、あと話し合いの場がありますから。なんか酒の肴にするものがある、あれやるから来るって集まった人たちが、若い人はこういう意見を持っているとか、ベテランはこういうのを持っているという話がここでやりとりができるというのが、この特徴ではないかという気がします。

駆け足で話をしてきましたが、そろそろにしようかな。

実はですね。このあと、120分分あったので。集落ごとのケアというのもやっています。今のは、やる気のある人たちですけれども、そうではなくて、14個集落がありますので14集落分ずつです。レーダーチャートと、どういう取り組みをしているか、これから何をすべきか、みたいなことの話合いを事細かに聞いていくとか。

あと総務省さんの力を借りながら、集落支援員という人たちを6名採用して、集落支援員の人たちがそれぞれ一週間の研修を受けて、それぞれの集落に入っていくって事細かな相談を受けている、というのが今、海士町で取り組んでいることです。だから、先程お話ししたようなやる気のある人たちは100人からスタートして、今300人くらいに増えています。ところが残り2,000人の人たちは集落からまだほとんど出て来ないということがありますので、集落支援員と役場の若手の30人の人たちと一緒に一週間の研修をやって、その中で、人の話をどういうふうに聞きだせばいいのかということを知ったうえで、集落支援員がそれぞれの集落の中に入っていくっていろんなデータを、さっきお見せしたような日本全国でお見せしたようなものを、集落ごとに見ていくと。青いのが増えていますけれども、空き家がどんどん増えていくという。2041年までいくと、こししか人は住んでいないという状態になりますが、それでもこのまま放っておきますか、と。放つとくのだったら、最後の人が苦しまないように撤退しましょう。でもそれが嫌なのだったら、今から立ち上がりましょう、というような話を、それぞれの集落ごとにしていっているというようなことをしています。

それと集落支援員の自立ですね。これもやっています。

集落支援員が、総務省のお金がなくなったら集落支援をやめちゃった、というふうになったら困るので、彼らには古道具屋さんをやってもらっています。集落を廻ってお婆ちゃん達の話聞けば、「実は隣の部屋がもう荷物でいっぱいになっちゃっている。」、とか「空き家の中に使っていない荷物がいっぱいある。」ということ聞きます。彼らは全員個人事業主になってもらって、税務署には開業届を出してもらって、古物商の免許を全部とってもらいました。で、古道具を扱えるようになってもらって今、保育園の跡地に集落のお婆ちゃん達からもらってきた古物をずっと集めて、ちょっと修理したりしながら、古道具&カフェっていうのをオープンさせたところですね、2012年1月から、今10ヶ月くらいですけども、月20万くらいの売上があるのです。月20万の売上ということは、イコール利益20万ということですね。仕入れ値ゼロですから。

そうすると、20万円あったら一軒家を借りて1万円くらいの家賃というところに4人くらい住んだら一人2,000円くらいの家賃で住めますから、20万円で何人くらいの集落支援員が食っていけるか、ということ、今計算しているところです。野菜とか魚も、集落を支援しているものすごくたくさんもらいますから、一番お金がかかるのは、インターネットのお金とコンタクトレンズのお金ですね。この二つが、すごくお金がかかる。3万円か4万円くらいあれば一人暮らしていけるのではないかと、計算をしているところです。だとすれば、集落を廻って、いらぬものを集めてきて、それを販売しながら、集落をまた廻り続けるということができるよう気がするのです。これ、車がたくさん止まっていますけれど、すごい人気です。Iターンとか、荷物を少なめに持ってきて、ここで買っているのです。

ここで、どんどん売上が上がって、在庫が減っていきます。在庫がなくなったら、集落を廻って仕入れをすれば良いわけですね。集落のお婆ちゃんここにきて「腰が痛い。」「大変ですね、買い物支援とかやりませんか。」「やりましょう。ちなみに、あの部屋のものをもらって帰っていいですか。」「ありがとうございます。じゃ、もらって帰ります。」で、仕入れに廻ればいい。あと、まだ1,200世帯くらい残っていますから、まだまだ在庫は集落にいっぱいあります。だから、日がなそこを廻って仕入れをしながら、集落を支援していくということができるのではないかな、というような計画を、今、作っているところです。

ちょっと自分の取組をベースにお話をさせていただきましたが、いずれにしても、今お話ししたことの中には、かなりの数の外部者が入っています。先程、地域の資源を資源として見える人が必要だということ、飯盛先生からもお話がありましたけれど、まず、我々自体が外部者であったということ。それから、Iターン、Uターン、ネイティブの中でいうと、Iターンと一部Uターンは外部者の視点を持っているので、ここを混ぜないとプロジェクトは面白くなっていかないこと。さらには、集落支援員というよそから入ってきた人たち外部者を、また新たにいれて、別の視点で集落を楽しんでいく方法というのを、彼ら自身が考えつつ、外部者が自立して自分たちの生活をそこで回していけるようにしなければいけない、という仕組みづくりも必要になってくると思います。

これらの活動を通じながら、つながりをつくっていったり、そういう地域で活動する意義みたいなものを、みんなと共有していくということを、我々も、しっかりと認識して進めていきたい、というふうに思います。そう

いう意味では、先程最初に基調講演していただいた飯盛さんのお話というのは我々の活動にもすごく当てはまっていますし、ああやって大学の先生がきっちりとまとめてくれると、僕ら自身も活動する勇気が湧いてくるなあという気がいたします。

時間がちょっと過ぎちゃいましたが、以上で、僕の話提供は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



